

連載

フィールド・アイ

Field Eye

ロンドンから——①

関西大学 細見 正樹

Masaki Hosomi



偶然の出会いをつむぐ

——ロンドンでの会話と海外学会の縁

私は2025年4月から12月初旬まで、大学のサバティカル期間を利用してロンドン・スクール・オブ・エコノミクス（LSE）のSenior Visiting Fellowとしてロンドンに滞在した。個人的なことだが、私が地方公務員から大学教員に転職して10年という節目に、初めて論文が掲載された『日本労働研究雑誌』で執筆の機会をいただいたことは、非常に感慨深い。

今回は現地でのコミュニケーションの話を中心に述べていく。この滞在では、50歳を超えて初めて海外での生活することとなった。慣れないせいか、しばらく経って体調を崩してしまい、病院に向かった。マスクをつけてバスを待っていたところ、散歩中の男性が話しかけてきた。「ノーマスク、ノーカンセン、オーケー？」（なぜか感染という日本語を知っていた）といわれた。他の人にうつしたくないから、と説明はしたが、マスクをつけると免疫が弱まるよと補足説明された。日本ではマスクはよく見かける光景だが、ロンドンでは公共交通機関でマスクをしている人はあまり見かけなくなっていた。マスクをしていると席を譲られそうになったこともあるくらいである。他にも、地下鉄では、隣の席の人が私のスーツケースを見て「このトランクは頑丈じゃなさそうだから、手荷物で預けたら壊れるかもしれないよ」と話しかけたこともある。大都市であるが、ロンドンでは意外と世話好きな人がいるものと思った。

ロンドンと言えばパブが思い浮かぶ人も多いだろう。LSEの敷地にもパブがあり、毎日夕方になると

学生は盛り上がっている。私はほとんど酒が飲めないので、日本では飲み屋に1人で入ることはまずしない。しかし、ロンドンでは1人でパブに入ることがけっこうあった。これは、アップルサイダーやノンアルコールビールがあって、アルコールが苦手であっても雰囲気を楽しむことが大きい。また、ハーフサイズで注文することができるので、これもまたありがたい。パブでは気楽に近くの席の人が話しかけてくる。あるとき1人でパブにいと、隣で飲んでいる家族連れから、ジャケットについて質問を受けた。「どこで買ったのか」と聞かれ「日本」と答えた。「じゃあどのブランドか教えて」と言われて確認したら、イギリスのブランドということがわかり、それをきっかけにしばらく話し込んだ。パブにもよるかもしれないが、パブには人々を打ち解けさせる雰囲気があるのかもしれない。

ロンドンではさまざまな方が生活をしているが、共通のマナーになっていると思われることもある。それは、私の前にいる人が歩いていてドアを開けると、私のためにドアを開けておいてくれるということである。私自身開けてもらう経験をしたし、私も後からくる人のためにドアを押さえるようにしていた。そんなときのThank you. - Not at all. という会話が好きだった。ロンドンは大都市なのだがこのようなコミュニケーションがとれることは意外でもあり、ありがたいと感じるときもあった。

気さくなコミュニケーションは滞在中に参加した欧州の学会でも感じられた。格安航空会社を使うと、多くの国に気軽に移動できるメリットを実感できる。特に思い出に残ったのは、プラハで開催されたEAWOP（European Association of Work and Organizational Psychology）Conferenceである。主要なストレス理論の職務要求度—資源理論（JD-Rモデル）を提唱したバッカー教授のセミナーに参加することができた。理論の説明やジョブ・クラフティングなどの諸概念との関わりについて学ぶとともに、このモデルの応用研究についてグループワークで議論した。それに加えて、バッカー教授のこれまでのキャリアや気さくな人柄にも触れることができ、非常に実りがあった。さらに、学会の帰りの飛行機のなかでは、学会参加者が隣と前の席に偶然いて、私が参加できなかったセッションや研究内容などについて情報交換することができた。

学会の懇親会でうまくネットワークを広げることができれば良いのだが、私は知り合いのいない立食パーティーは本当に苦手である。まだ社会人院生だったときに参加したある国内学会では、懇親会が苦い思い出として残っている。海外学会のカクテルパーティーだと輪の中に入っていくのはけっこう苦勞するし、話かけてみてもおおまかな研究テーマや観光の話で会話が終わることもある。

その一方、海外学会ではネットワークづくりを促してくれる仕組みが多いのがあるがたい。研究セッションでも、登壇者の発表後、小グループに分かれてディスカッションするものも多い。ロビーに出るとデザートが用意されており、知り合ったばかりの研究者とスモールトークを行いやすい。ある学会では、研究テーマをもとに主催者側が4名程度に振り分けてくれて、一緒にディナーに行くことが定番となっている。その場で知り合った研究者と、別の学会で再会することができたことはうれしかった。

偶然の出会いは大それたと思う。クルンボルツの計画的偶発性理論のとおり、偶然の出会いを活かすことによって新たなキャリアが開けることもある。私がLSEで在外研究できたのも、海外学会での縁がきっかけである。3年前ボストンで開かれた学会に参加したとき、ランチ交流会でLSEの研究者と隣になった。私と同じくワーク・ライフ・バランスを研究している同僚がいるので紹介する、と言われた。忘れかけていたころ、紹介を受けた研究者から東京に来るので会えないかと連絡があった。東京の会議室で実りある議論を行い、国際共同研究が始動した。喫茶店に場所を変え共通の趣味であるアニメの話題で盛り上がった。一連の流れのなかで、LSEに在外研究することの約束を取り付けるに至ったのである。

海外学会であらためて実感したのは、名刺交換のシーンを見かけないことである。私も含めて日本人どろしは積極的に名刺交換していると感じる。海外の学会で会合う日本人研究者は、国内の学会では出会わないであろう他分野の方ということもけっこうある。日

本人にとっては、名刺交換を行うことで、自身のアイデンティティを明らかにして、印象づけを行うことができる。

一方、海外学会だと名刺を渡したとしても、海外研究者が名刺を持っていないことがほとんどで、向こうからコンタクトすることも少ない。ただ、海外研究者とは、別の学会で再度会おうと、お互い顔を覚えていて、親交が深まるものである。前回は観光の話しかしていなくても、2度目に会うと不思議と活発なトークができる。これは名刺に頼っていないことや、直接会って場を共有することの効用なのだろう。その意味で、ヨーロッパの研究者は飛行機で国をまたいで学会参加しやすく、研究者どうしのつながりを深めやすい。それに対して、日本人研究者は、もともと運賃や参加費も高いうえに、円安もあいまって海外学会のハードルが高い。このため、何度も顔を合わせて関係を深めていくことは容易ではなく、日本人研究者は不利な立場にあるだろう。

また、せっかく海外で縁があった研究者や現地日本人と関係をつなぐこともまた難しい。特に、海外と日本の大学では授業期間が異なるため、海外研究者が研究に集中し始める時期に、日本では授業や学務で忙しいということも起こりえる。明確な処方箋が見つからないのだが、オンラインが一助となるかもしれない。リモート会議を用いると打ち合わせの時間を合わせやすいし、日時を決めることでペースメーカーにもなりうる。また、名刺交換はしなくても、SNSの連絡先を交換することができれば、お互いの研究や日々の出来事を理解しやすくなる。テクノロジーをうまく活用しながら、海外での出会いを長く育んでいきたいものである。

ほそみ・まさき 関西大学商学部教授。最近の主な論文に“Planned Happenstance and Entrepreneurship Development: The Case of Japanese Undergraduate Students,” *Administrative Sciences*, Vol. 14, No. 2 (2024年)。人的資源管理論・組織行動論専攻。